

第3回 加越沿岸海岸保全基本計画検討委員会

会 議 概 要

1. 日 時：令和6年8月5日（月） 14：00～15：30
2. 場 所：石川県庁1階 101会議室（WEB会議併用）
3. 出席者：由比委員長、有田委員、中村委員、馬場先委員、嶋崎委員（笹原委員代理）、五十川委員、舟川委員、柴田委員、吉田雅英委員（森田委員代理）、福井委員（吉田健一委員代理）、桜井委員、坂本委員（宮橋委員代理）、川端委員（井出委員代理）、窪田委員（田村委員代理）、土田委員（村山委員代理）、小泉委員（油野委員代理）、上杉委員（岸委員代理）、中佐委員（川口委員代理）、杉谷委員（寶達委員代理）、奥田委員（稲岡委員代理）

4. 会議次第

(1) 開 会

- ・ 事務局の司会進行により開会された。

(2) 挨拶

- ・ 石川県土木部長の桜井委員から挨拶が行われた。

(3) 議 事

1) 議事公開の確認

- ・ 委員長より議事公開の確認が行われ、委員の了承を得た。

2) 第3回 加越沿岸海岸保全基本計画検討委員会 資料説明

- ・ 事務局より委員会資料に関する説明が行われた。

(質 疑)

- ・ 各委員からの主な質疑・意見内容については、次頁以降に示す。

(議事概要及び資料公開の可否について)

- ・ 委員長から議事概要の公開について確認が行われ、委員の承認を得た。

(4) 閉 会

- ・ 事務局の進行により閉会された。

1) 事務局より、「資料3：第3回 加越沿岸海岸保全基本計画検討委員会資料」の説明が行われた。

2) 各委員からの主な質疑・意見

①第1章：過去の検討委員会の内容

- ・ 漁獲量が減少している要因は、魚類の問題に加え、漁業従事者の不足も影響があるという説明だったが、漁業従事者の10年間の変化について検証されているか。（委員長）
→（委員）石川県全体の漁業従事者数の記録において、平成25年は3,296人に対し、平成30年は2,409人であり、減少傾向にある。
- ・ 汀線の変化状況について、今後も定期的にモニタリングを継続して実態を把握するとともに、原因と結果の関係について考察していくことが重要と思われる。
- ・ 今回は測量基準点から汀線位置までを表示しているが、将来的には浜幅で整理することが望ましいと考えられる。（委員長）
- ・ 常時波浪の変化傾向の検討方法について、風向きについては16方位ではなく、もっと細かく角度を設けて検討するなど、引き続き検討を進めていただきたい。（委員長）

②第2章：ゾーン区分見直し案の共有

- ・ 特になし

③第3章：気候変動を踏まえた将来外力の設定

- ・ 2012年の爆弾低気圧の波高を含めることはよいのかという過去の委員会の指摘について、2012年の爆弾低気圧の波高を含んだうえで、観測データの間隔を2時間間隔にすることへの指摘であるため、結論の表現を修正していただきたい。（委員長）
- ・ 20分間隔のデータと2時間間隔のデータについて今回改めて整理していただいた結果をみると、波浪データの見直しの考え方は問題ないと思われる。

④第4章：現況施設等への影響評価

- ・ ブロック重量の算定で様々な算定式を使用しているが、この式の中で使用される波高は沖波波高か堤前波高か、どちらを使用しているか教えていただきたい。
→（事務局）堤前波高を使用し算定している。

⑤第5章：整備目標年次の審議

- ・ 特になし。

⑥第6章：まとめ

- ・ まとめの2つ目の現況施設の状況について、一部海岸では満足しない箇所があるが、現状でどのような対策を実施中なのかを具体的に説明いただきたい。(委員長)
→ (事務局) 打ち上げ高の算定は、離岸堤や人工リーフを考慮しない検討をしているが、片山津海岸や小松海岸では、離岸堤や人工リーフの整備や養浜を実施しており、打ち上げ高を抑えられるものと期待している。また、必要ブロック重量を満足していない施設については、過去の高波浪にも耐えているという実態を踏まえ、施設の更新時期に合わせて見直しを図っていく方針である。

⑦第7章：今後のスケジュール

- ・ 特になし。

⑧その他

- ・ 今回の検討において、将来外力が大きくなったことにより海岸侵食が懸念される。千里浜海岸での委員会では、汀線の変化についてのシミュレーションを行っているが、このようなシミュレーションに対しても、今回算定した将来外力を使用して検討していくべきかご意見を頂きたい。
→ (委員長) シミュレーションの方が、信頼度が高く、実態を表せるようになる。シミュレーションを随時活用していくことがよいと思われる。
(委員) 将来予測するとき、2度上昇が何年後に起こるかについて、2度上昇する過程が、線形に上がっていくか、指数関数的に上がっていくかによって状況が変わってくると思われる。そのため、何年先までを知りたいのか、何年先までをどのように考えていくかが課題になると思われる。

以 上